

2018年4月14日（土）

1限（10：00－11：20）

※この時間帯はこの一コマのみです。

●講義タイトル：言語研究の面白さ

講師：尾上 圭介（東京大学名誉教授）

講義概要：

日本語の文法をめぐって考えることの面白さと、母語を対象とするゆえの有利さについてお話ししたい。

今回の第一の話題は、存在文の存在物（「机の上に本がある」の「本」）は大いばりで主語と言えるかということについてである。普通の動詞文の主語なら文脈的環境によって「は」と「が」が自由に選択されうるが、存在文ではほぼ「が」に限られる。また、質問文にした場合は、助詞に「は」も「が」もきわめて使いにくい。これはどうしたことか。少なくとも普通の主語とは大きく違う。（事実、例えば中国語などではこのような存在物は主語ではなく目的語で語られる。英語の There is a book. の a book は、観点によって主語であるともないとも言える。）

このような特殊な主語は、①存在物主語に限らない。②情意文の情意対象主語（「故郷が懐かしい」の「故郷」、「水が飲みたい」の「水」）や③可能・自発などのラレル文の動作対象主語（「納豆が食べられない」の「納豆」、「鶯の声が聞かれた」の「鶯の声」）などにまで広がる。このような普通とはやや異なる肩身の狭い主語を、「B級映画」や「B級グルメ」にならってここでは「B級主語」と呼んでおきたい。B級主語と普通の主語との違いは説明しやすいが、両者の近接性つまり両者を共に主語と呼んでよい理由のほうがむしろ説明しにくい。母語使用者としての感覚を出発点として両者の近接性、連続性を探り、それを基盤として「主語とは何か」という根源的な大問題を考えていく。そういうところに、母語を手掛かりとして文法を考える面白さがある。「リンゴが赤い」「リンゴがある」「リンゴが食べたい」「リンゴが食べられない」、この4者の「リンゴが」が共に主語であるという論理をどのように組み立てるか、（あるいは4者のすべてが主語とは言えないという側に立ってその理屈を考えるか）、自分の言語的直観を頼りにそれを理論的主張にまで高めていくプロセスにこそ日本語文法研究の醍醐味がある。

どの言語にも品詞として名詞と動詞が必ずあり、文の基本的成分として主語と述語がある。それはなぜか。どの言語でも動詞が述語となり（形容詞も述語になることがある）、動詞述語には必ずテンスとモダリティがある。それはなぜか。そのような大問題に対する解答を、母語ゆえの緻密な事実観察と確かな実感を持って理論的に組み立てていくところに、日本語文法を研究する面白さがあると言ってよい。

皆さん、日本語の文法と意味について一緒に考えましょう。

2 限 (11:40-13:00)

※ここからは同じ時間帯に二つの講座が開講されます。

●講義タイトル：実験言語学—ことばを話す過程を探る

講師：酒井 弘（早稲田大学）

講義概要：

今年度の開講科目「実験言語学」では、言語学研究に利用されるさまざまな調査・実験方法を取り上げますが、春期講座ではそのなかからユニークな方法の一つを選んで紹介します。わたしたちは多くの場合、目の前で起こった出来事をいとも簡単にことばで表現することができます。しかしそのとき、わたしたちの頭の中でなにが起こっているのか、つまり発話を産出する過程はどのようなものなのか、という疑問に答えるのは簡単ではありません。この疑問に答えることを目指して研究を進めるためには、産出過程を刻一刻と追いかけて行くデータ（「オンライン」のデータと呼ばれます）を使う事ができれば最も効果的ですが、人間は比較的短い時間の中でさまざまな発話を産出できることが、オンラインのデータを得る事を困難にしています。さらに問題を複雑にしているのは、文を産出し始めた時、すでに文の組み立ての大半は終わっていると考えられることです。どうすれば、言語学研究者はこのような厳しい制約を克服して必要なデータを得る事ができるのでしょうか。春期講座では、心理言語学研究で使用される代表的な手法の一つである視線計測（eye-tracking）を中心に、言語の産出過程を探る研究について紹介します。簡潔に言語産出研究の歴史を振り返るとともに、日本語とスペイン語の関係節の産出過程を探る研究など、最新の研究事例を挙げて説明します。

●講義タイトル：音声学—音声の多様性

講師：中川 裕（東京外国語大学）

講義概要：

この講義では、世界の言語音の多様性と普遍性を理解するための調査研究について具体的にわかりやすく解説します。そのために、現行の国際音声記号（IPA）の枠組みと近年の音韻類型論の成果を手掛かりとします。主に分節音（子音と母音）を取り上げます。

この講義によって、音声学A（前期）・音声学B（後期）で講義し実習する内容は、単なる個々の言語音の観察・記述のための道具ではなく、言語学という学問領域の発展に貢献するための知識体系の一部であることがわかるはずです。

また、音声学A（前期）・音声学B（後期）の受講が円滑に開始できるように、講義の過程で、実践的な音声学的技能訓練のTipsにも触れます。

3 限 (14:00-15:20)

●講義タイトル：認知言語学Ⅱ

講師：池上 嘉彦（東京大学名誉教授）

講義概要：

NHK テレビ、第3チャンネルで、以前「現代ジャーナル：シリーズ日本語」と題して放映した番組（45分x3）から、日本の生態を具体的に捉えた映像や非日本語話者による日本語体験についての証言をいくつか抜粋。それをビデオで見てもらい、そこから日本語と日本語話者について（時には、英語と英語話者などとの対比も踏まえて）どのような言語的事実が読み取れるかを考える。取り上げられる話題は、（1）日本語話者が「私の娘は男です」、「ぼくはうなぎ」などというとき、（2）英語話者にとっての“I'm orange juice”という表現、（3）「駄目です」とは言わないで、「ちょっと、駄目みたい・・・」などという言い方を好んでする日本語話者の心理、（4）「太郎が好きです」と「太郎のこと、好きです」の違いは？、（5）川端康成の『雪国』の冒頭の文とその翻訳とのずれ、（6）「<ナル>的表現」を好む日本語話者（ビデオは全部合わせて20分ぐらい）である。

●講義タイトル：日本語文法：受身文・ラレル文 序説

講師：川村 大（東京外国語大学）

講義概要：

5月から始まる本講義の問題意識について、いくつかの話題を取り上げて述べてみたいと思います。

例えば、「太郎は先生にほめられた」などの受身文の「定義」を述べよと言われたら、あなたならどう答えますか。「①述語動詞がラレル形（レル・ラレルのついた形）である」「②能動文の主語がニ格などに繰り下がる」「③能動文の目的語が主語（ガ格）に繰り上がる」の3点を答えれば、ひとまずよさそうです。しかしこの答えでは、「私は子供に一晚中泣かれた」「和子は文子に隣の部屋でピアノを弾かれた」などは③を満たしていないから「受身文」ではないことになります。それでいいのでしょうか（「それでいいのだ」という人もいますが）。また、「私には、東京に働きに出た息子の事が案じられる」は自発を表し、「こんな辛いカレーは僕には食べられない」は可能を表す文ですが、①～③を満たしています。この2つの文は「受身文」と言ってよいのでしょうか。①～③は、英語などの *passive sentence* の定義としてなじみ深いものですが、それを日本語にただ当てはめても、母語話者が「受身文」だと直感している文を過不足なくカバーすることができません。では、日本語の受身文を適切に定義するにはどうしたらよいのでしょうか。

このほか、「自発」「可能」などの用語をめぐる問題点、現代語研究における「ヴォイス」という用語の使い方をめぐる問題などについて述べる予定です。

4 限 (15 : 40 - 17 : 00)

●講義タイトル：意味論への招待

講師：酒井 智宏（早稲田大学）

講義概要：

意味論は理論言語学の中で一番とつきやすい分野に見えて実は一番とつきにくい分野です。理由はいくつかありますが、ここでは二つあげてみます。

理由 1: 「意味」の研究は「ことば」の研究の中でもっとも重要なものと思われるかもしれませんが、しかし実のところ、欧米の言語学では、長らく「意味」のような主観的で不純なものは科学的研究の対象になりえないと考えられ、意味の研究はタブー視されていました。そうした風潮の中で意味の研究を行っていたのは、言語学者よりもむしろ哲学者や論理学者でした。このため、意味の問題を理解するには狭義の理論言語学以外への目配りが不可欠です。

理由 2: 実はただの「意味論」という分野は存在しません。存在するのは形式意味論、語彙意味論、認知意味論、etc. であって、「意味論」ではありません。意味の問題はあまりにも多面的なので、研究対象と方法論を限定するのは正当な研究方略です。その反面、XX 意味論と YY 意味論では着眼点が大きく異なり、XX に注目することが必ずしも YY を理解するための助けにならないこともあります。このため、「意味」そのものを理解する（あるいは少なくとも理解した気になる）のは非常に困難です。

春期講座では、狭義の理論言語学以外への目配りをしつつ、どの立場に立つにせよ意味について最低限心得ておきたい問題の一端にふれてみます。それにより、時代が変わっても意味に関する根本的な問題はさほど変わっていないということを示したいと思います。

●講義タイトル：文法原論

講師：梶田 優（上智大学名誉教授）

講義概要：

準備中

2018年4月15日（日）

1限（10：00－11：20）

●講義タイトル：生成文法 I－生成文法を通して言語を考える

講師：高橋 将一（青山学院大学）

講義概要：

本講座では、生成文法を通して言語を考えることで、私たちの言語の特徴を三つの点から深く掘り下げていきたいと思えます。まず、私たちは、言語を使用する際、非常に多くの文法的なルールに従っています。それらのルールは、母語のものであれば自然と習得し、ルールの存在自体を意識することも通常ありません。況してや、「どうしてそのようなルールが存在するのか」といったことを考えることも普段はないかと思えます。しかし、生成文法を通してルールを考えた場合、このような言語に関する本質的な問題に対しても、とても自然な説明を与えることができることを見ていきます。次に、私たちは、ある文にはある解釈が存在し、他の解釈は存在しないということを直感的に判断することができます。「私たちは、なぜこのようなことができるのか」という問いに対しても、生成文法をもとに考えることで、理解できる部分があることを見ます。最後に、生成文法理論の観点から考えなければ、発見することやその性質を理解することも困難であったと思われる現象を概観します。このような事例を考えることで、生成文法を学ぶことの意義やおもしろさを感じてもらえたらと思っています。

●講義タイトル：フィールド言語学－右も左もない言語と言語相対論の現在－

講師：長屋 尚典（東京外国語大学）

講義概要：

今年度私が理論言語学講座で担当する「フィールド言語学」は、自然言語の自然なデータを客観的に収集し分析するための方法論であり、言語の科学たる言語学の基本と言えます。その成果は個別言語の記述的研究はもとより、理論的にも一般言語学に貢献しています。たとえば、言語類型論の分野においては、フィールド言語学を活かして日本語や英語だけを見ていただけでは分からない人間の言語の特徴が発見され、2000を超える言語普遍性が確認されています。

この春期講座では、私自身のインドネシアにおけるラマホロット語のフィールド言語学の成果を紹介しながら、「右も左もない言語」を具体的に観察したいと思えます。この言語では、「木の右に人が立っている」のように相対的空間参照枠を用いることはできず、「木の山側に人が立っている」のような絶対的空間参照枠を用いるしかないのです。さらに、この具体例の検討を通して、「言語が思考に影響する」という言語相対論（サピア＝ウォーフの仮説）にまつわる最近の研究をみなさんと一緒に考えていきたいと思えます。

2 限 (11:40-13:00)

●講義タイトル：認知言語学 I

講師：西村 義樹 (東京大学)

講義概要：

準備中

●講義タイトル：言語心理学 -乳児による言語音の知覚

講師：郷路 拓也 (津田塾大学)

講義概要：

今年度の春季講座では、第一言語獲得研究の中でも、とくに発達の早い段階に焦点を当て、「乳児による言語音の知覚」について取り上げます。

私たちが外国語を学んでいると気がつくのが、自分の母語にない音声の区別はしばしば聞き分けるのが難しい、ということです。例えば日本語話者にとって、英語のいわゆる「R」と「L」は、その違いが中々聞き取れるようになりません。一方で英語の母語話者は、何の苦もなくこれらの音を弁別できます。では一体、私たち日本語話者と、英語話者の間の違いは、生まれてから今に至るまでのどの段階で生じたものなのでしょうか？

言語音の知覚に関して、自分の母語による違いが現れ始めるのは、実は発達の非常に早い時期であることが分かっています。具体的には、生後 12 ヶ月に達する前にそれは起こります。まだ自分では「ことばを話す」ことができない乳児が、自分の母語を身につけるための準備を着々と積み重ねているのです。

講座では、これまでの言語獲得研究が、乳児の頭のなかで一体何が起きているのかを明らかにしてきたその過程と、そこで行われた様々な実験研究について紹介します。この講座を通して、「人間のこども」という生物の不思議さを感じてください。

3 限 (14:00-15:20)

●講義タイトル：語形成とレキシコン—「動」と「静」のあいだ

講師：杉岡 洋子 (慶応義塾大学)

講義概要：

理論言語学講座 (後期)「語形成とレキシコン」では、日本語と英語の様々な種類の語形成に見られる二面性、つまり規則性と不規則性 (語彙性) について、語彙意味論や統語規則との関連をとおして論じます。この二面性は、次のような新語と辞書の関係にも見てとれます。昨年の流行語大賞の候補になった「インスタ映え」は、辞書編纂者が選ぶ三省堂の「今年の新語」には入らなかったのに、よりマイナーな「インスタ蝿」は選考対象に

なりうるそうです。たしかに「インスタ映え」は初めて聞いた人も名詞「インスタ（グラム）」と動詞「映え（る）」を足せば意味がある程度わかるし、インスタに代わる何かが出てきたときに「○○映え」という新語が作られることが予想できます。それに対して、「インスタ映え」は造語の背景を知らなければ意味がわかりにくい、だから辞書に入る可能性があるのです。

私達が使う語彙の多くは頭の中の辞書に記憶されていて、言語の「静」の部分にあたります。その一方で、「インスタ映え」や「子供っぽさ」のように複数の要素からなる語には、統語規則に近い原理と規則性、つまり言語の「動」の部分を示すものがあります。さらに、文の派生との重要な違いは、語形成が示す規則性や生産性は決して一様ではないということです。

この講義では、語形成の多様性を示す例として、動詞から名詞を作る過程（名詞化）のいくつかのタイプを取り上げ、派生名詞の異なる性質が動詞の語彙情報のレベルの違いから説明できることをお話しします。語形成が示す二面性の解明は、語というレベルにとどまらず言語の本質に迫る試みであることをお伝えできればと思います。

●講義タイトル：社会言語学入門

講師：嶋田 珠巳（明海大学）

講義概要：

「言語学」の前に「社会」が付いて、「社会言語学」。言語学のすこし厳格なイメージも、「社会」言語学になるとどことなく人間味が加わったようで、とっつきやすさを感じるでしょうか。それとも、「社会」が入った分、実際のところはもっと複雑になる、などということもあるのでしょうか。

そもそも、ことばは人が話すもの。その話者のいるところ、属している集団、社会、コミュニティ。言語を理解するのに、いちいち人を、いちいちコミュニティを意識せずには始まらない。社会言語学のおもしろさはそういったところから展開されます。

この講義では、日頃みなさまがすでにもっているかもしれない、ことばについての小さな気づき—いわば社会言語学の種のようなもの—について、また、わたしが言語学のこんなところが楽しい！ 素晴らしい！ と思っているようなことについて、お話してみたいと思います。比較的自由に、それでいて社会言語学はどんなことをする学問領域かを感じていただきながら、みなさまと有意義な時間がすごせればと思います。

4 限（15：40—17：00）

●講義タイトル：生成文法Ⅱ

講師：今西 典子（東京大学名誉教授）

講義概要：

生成文法理論では、人間の精神(こころ)・脳に実在し認知体系の一部を成す生得的な言

語機能(the faculty of language: FL)は、誕生直後の初期状態から言語環境に触れるにしたがって徐々に変化して安定した最終状態に到達すると捉えられ、このような言語獲得過程の初期状態は普遍文法(UG)、最終状態は個別言語の文法(大人の文法)と呼ばれます。また、言語機能 FL に係わる根本的な問題として (a)-(c)が主なる研究課題とされ、

- (a) 言語的とみなされる特性のどの程度が言語に固有な特性の具現なのか、また、どの程度が言語の外側の認知体系の特性の反映なのか。
- (b) すべての言語に共通する普遍特性と個々の言語に特有な変異特性はどのように捉えられるのか。
- (c) 言語間および一言語内における有標の特性はどのようにして無標の特性に関連づけられるのか。

類型論的に異なる言語のさまざまな言語事象についての実証的な研究が行われ多くの知見が蓄積し、UG の内部構築についての理論的な研究が飛躍的に進展しています。

春期講座では、このような研究課題をかかげて人間の言語機能の解明を進めている生成文法の最近の研究成果について理解を深める一助として、言語間変異や言語獲得に関する資料も踏まえて、「照応」、「削除」、「文断片」というような言語事象について考察します。

●講義タイトル：言語哲学への招待

講師：峯島 宏次（お茶の水大学）

講義概要：

言語哲学は、理論言語学の中でも特に現代の意味論・語用論の発展と深く関係しています。哲学者・論理学者のフレーゲに始まる言語分析の手法は、その後、多様な展開を見せ、現在では言語哲学と意味論・語用論とは互いに切り離すことのできない魅力的な学問領域を形成しつつあります。そこで分析の対象となる言語現象は、“the”（ラッセル）のような歴史的にも重要なものから始まり、“ouch/oops”（カプラン）のような従来の枠にとらわれない表現まで、じつに多様なものとなっています。

この講義では、理論言語学講座（後期）「言語哲学」への導入として、理論言語学（特に意味論・語用論）の基礎となる言語哲学の考え方についてお話しします。言葉の意味について考えるとき、「文脈に依存する」という考え方はきわめて魅力的です。同時に、「文脈依存性」は、現代的な意味論・語用論の目覚ましい発展にもかかわらず、いまだ大きな謎として残されている概念でもあります。春期講座では、この「文脈依存性」という概念を軸として、特に、意味と意図、思考とコミュニケーション、意味論と語用論の境界、真理条件的内容と非真理条件的内容といった、この分野の基本的な問題・概念についてお話しします。言語哲学で論じられてきた考え方が、私たちがふだん使っている言葉の分析にどのように役に立つのか、具体例を見ながら考えたいと思います。